

論文

カナダ国オンタリオ州における学校図書館改革論 – 『共同学習』の主たる分析を通して

大城 善盛

(元同志社大学教授)

A Vision of School Libraries in the Province of Ontario, Canada - The Analysis of OSLA's *Together for Learning*

By Zensei OSHIRO

(Former Professor at Doshisha University)

抄録

日本の学校図書館の状況改善の参考に資すべく、先進的な取り組みが行われているカナダ・オンタリオ州の学校図書館改革論の分析を試みた。その際に、同州の学校図書館の現状や報告書にも言及した。

方法として、オンタリオ図書館協会の『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』や『オンタリオ州の典型的(模範的)な学校図書館』、オンタリオ学校図書館協会の『共同学習』を分析した。分析の結果、『共同学習』は学校図書館の「ラーニング・コモンズ」化であり、優れた学校図書館改革論であることが分かった。そして、改革論の中では、ティーチャー・ライブラリアンの役割が極めて重要視されており、それは逆境の中での改革論であったことが分かった。

Abstract

The paper made the analysis of *Together for Learning*, issued by Ontario School Library Association (OSLA) in 2010. Together with its analysis, it surveyed the condition of school libraries in the Province of Ontario in the 21st century. It examined *School Libraries & Student Achievement in Ontario* and *Exemplary School Libraries in Ontario*, issued by Ontario Library Association in 2006 and in 2009 respectively.

The paper has found that *Together for Learning* is the vision of a school library which OSLA has tried to transform by renaming a school library to a learning common. It has also found that the role of a teacher librarian is greatly emphasized.

1 はじめに

この論稿で、日本の学校図書館の状況改善の参考に資すべく、先進的な取り組みが行われているカナダ・オンタリオ州の学校図書館改革論の分析を試みる。

2003年、カナダの学校図書館界及び教育界にショックを与える出来事が起こった。学校図書館学の権威者の一人であるヘイコック (K. Haycock) が同年『カナダの学校図書館の危機』 (*The Crisis in Canada's School Libraries*) を刊行し、カナダの学校図書館が危機的状況にあることを明らかにしたのである 1)。

その刊行物は次のように記している。

カナダの学校図書館は非常に悪い状況にある。ティーチャー・ライブラリアン (teacher-librarian) は職を失ったり、別の職に廻されたりしている。コレクション構築は予算カットのためにうまく行っていない。教室にワークステーションさえあれば、インターネットの時代において図書館は要らない、と信じている校長もいる。カナダの多くの学校図書館が一日中閉まっていたり、一時的に閉まったりしている。

学校図書館に関する多くの研究が、ティーチャー・ライブラリアンを有する学校図書館は児童生徒に良い (プラスの) 影響を与えることを明らかにしている。しかし、カナダには学校図書館と児童生徒の学習成果との関係を調査した研究はない。この知識の差がカナダで増えつづける学校図書館トラブルの要因になっていると思われる。

オンタリオ州 (Province of Ontario) では、5年前まではフルタイムのティーチャー・ライブラリアンを擁している小学校は42%あったが、現在では10%に減っている。アルバータ州 (Province of Alberta) では、ハーフタイムも含めたティーチャー・ライブラリアンの数は1978年の550人から106人に減っている。カナダでは、持っている地域と持っていない地域の差 (経済的地域格差) による社会的格差はますます広がっている。

ヘイコックの上記の報告にショックを受けたカナダ統計局 (Statistics Canada) はコイシュ (D. Coish) に調査を依頼した。コイシュは2005年に『カナダの学校図書館とティーチャー・ライブラリアン』 (*Canadian School Libraries and Teacher Librarians*) の書名で調査結果を公表した 2)。

その報告書は次のように記している 3)。

カナダの多くの学校図書館で、利用可能な資料は劣化している。フルタイムのティーチャー・ライブラリアンの職はパートタイム職に配置換えされるか、もしくは全く無くなっている。オンタリオ州の小学校のフルタイムのティーチャー・ライブラリアンの数は、1998/1999年度以来60%減少している。アクセスの面 (開館時間) でも減少が見られる。

2014年には、カナダ王立協会 (Royal Society of Canada) も、「カナダの学校図書館はこの20年間低下し続けている。(中略) 14,450あると予測される学校図書館は、職員、リソース、利用において問題を抱えている」 4)、と記している。

以上のような状況に対して、カナダの (学校図書館界も含めた) 図書館界は黙っておらず、いろいろな行動を起こしている。2010年にオンタリオ学校図書館協会 (Ontario School Library Association, 以下 OSLA) が『共同学習』 (*Together for Learning*) を作成・公表し 5)、2014年にはブリティッシュ・コロンビア・ティーチャー・ライブラリアン協会 (British Columbia Teacher Librarians' Association) が『学校図書館から図書館ラーニング・コモンズへ』 (*From School Library to Library*)

Learning Commons) を作成・公表し 6)、同じ 2014 年にカナダ図書館協会 (Canadian Library Association、以下 CLA) が学校図書館基準とも呼べる『先端学習』 (*Leading Learning*) を刊行している 7)。

また、カナダの学校図書館に関心を抱く研究者や実践者 (ティーチャー・ライブラリアン) 等が 2010 年に「トレジャー・マウンテン・カナダ」 (Treasure Mountain Canada) の名称のもとにシンポジウムを開催し、カナダの学校図書館の抱える問題点や将来像を議論している。そのシンポジウムはその後ほぼ隔年ごとに開催されている 8)。

カナダの学校図書館改革論を理解するためには、上記の 3 種の文献、すなわち『共同学習』、『学校図書館から図書館ラーニング・コモンズへ』、及び『先端学習』を理解する必要がある。この論稿では『共同学習』を取り上げ、オンタリオ州における学校図書館改革論の理解を試みる。なお、カナダでは教育行政は国 (連邦政府) ではなく、州 (province) の管轄下にある。また、オンタリオ州の人口はカナダの総人口の約 3 分の 1 を占めると言われ、カナダの学校図書館界ではオンタリオ州の学校図書館界はリーダー的存在であり、オンタリオ州の事例研究はそれなりの意義を有している。

論の進め方としては、次章で 2004 年以降のオンタリオ州の学校図書館の状況を概観し、3 章でオンタリオ図書館協会 (Ontario Library Association、以下 OLA) の 2006 年作成の『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』 (*School Libraries and Student Achievement in Ontario*) 9)、4 章で同 OLA の 2009 年作成の『オンタリオ州の典型的 (模範的) な学校図書館』 (*Exemplary School Libraries in Ontario*) 10) について言及し、5 章と 6 章で『共同学習』の概観・分析・考察を試みる。

21 世紀に入ってから (オンタリオ州も含めての) カナダの学校図書館に関する先行研究 (関連文献) は少なく、『先端学習』を紹介している文献の岡田大輔の訳 11) と、関口礼子による『学校図書館』誌の一連の報告 12)、及び全国学校図書館協議会の『カナダ・アメリカに見る学校図書館を中核とする教育の展開』 13) の報告があるのみである。

2 2004 年以降のオンタリオ州の学校図書館の状況

オンタリオ州には公立と私立の 2 種の学校があり、学校図書館の状況を概観する際にはこの 2 種の学校図書館を概観する必要がある。しかし、まとまった情報としては公立学校の図書館に関する情報しか得られない。そのため、以下では主に公立学校の図書館の状況を概観する。

カナダの公教育の振興を目的として設立されている私的財団「教育のための人々」 (People for Education) の「2013 年度の年次報告」によると、2004 年から 2012 年までのオンタリオ州でティーチャー・ライブラリアン (パートタイムも含む) が勤務している公立学校の状況 (%) は表 1 の通りである 14)。(なお、「中等学校」は secondary school の訳で、日本の高等学校が含まれる。)

また、同年次報告によると、2013 年の状況は次のようであった 15)。

ティーチャー・ライブラリアンが勤務している小学校の 3 年生と 6 年生は、勤務していない学校の 3 年生と 6 年生より読書好きの傾向にある。しかし、ティーチャー・ライブラリアンが勤務している小学校の率は、1990 年代末の削減以来未だ元に戻っていない。56% の公立小

表1 ティーチャー・ライブラリアンが勤務している公立学校の状況

| | 小学校 | 中等学校 |
|-------|-----|------|
| 2004年 | 56% | 80% |
| 2006年 | 55% | 73% |
| 2008年 | 60% | 76% |
| 2010年 | 57% | 68% |
| 2012年 | 55% | 68% |

学校にのみティーチャー・ライブラリアンは勤務してなく、この数字 (%) はここ数年変わっていない。また、その3分の2以上はパートタイムのティーチャー・ライブラリアンである。33%の公立小学校にはライブラリー・テクニシャン (library technician: 短期大学で主に図書館のルーティンの、技術的な領域を履修した人) だけが勤務している。11%の公立小学校には図書館職員は全くいない。生徒の独立学習や調査学習が重要視される中等学校の場合、ティーチャー・ライブラリアンは68%の公立中等学校にしか勤務していない。しかし、ほとんどがフルタイムである。また、オンタリオ州の東部では11%の公立小学校にしかティーチャー・ライブラリアンは勤務していない。しかし、トロント州都圏ではその率(居る率)は83%にのぼる。

なお、「教育のための人々」の「2016年度の年次報告」によると、2016年度の状況は以下のようであった(16)。

- 54%の公立小学校にティーチャー・ライブラリアンが勤務している。前年の60%、1998年の80%と比べると低下している。フルタイムのティーチャー・ライブラリアンは10%の公立小学校にしか勤務していない。
- ティーチャー・ライブラリアンが勤務している中等学校は前年の72%から少し増えて74%になっている。しかし、フルタイムのティーチャー・ライブラリアンが勤務している学校数は少し減っている。
- ライブラリー・テクニシャンは学校図書館で重要な支援的役割を果たしている。しかし、ティーチャー・ライブラリアンの役割とは異なる。ティーチャー・ライブラリアンとは、図書館の専門家としての資格を有する、オンタリオ州からの教員免許状を取得した人のことである。現在、低い賃金で雇われているライブラリー・テクニシャンがティーチャー・ライブラリアンに取って代わって来ていると推測される。49%の公立小学校にライブラリー・テクニシャンが勤務している。前年は43%であった。49%の公立中等学校にライブラリー・テクニシャンが勤務している。前年は44%であった。
- 地域や場所による相違も存在する。小さな町や田舎では44%の公立小学校にしかティーチャー・ライブラリアンは勤務していないのに対し、都会では60%の公立小学校にティーチャー・ライブラリアンが勤務している。小さな町や田舎では53%の公立小学校にライ

ブラリー・テクニシャンが勤務している。それに対して、都会では46%の公立小学校にしかライブラリー・テクニシャンは勤務していない。

私立の学校でも図書館は苦しい状況にある。例えば、トロント・カトリックDSB(教育委員会)は予算削減を理由に、2015年に管轄下のすべての小学校のライブラリー・テクニシャン職を削除している。また、ウインザー/エセックス・カトリック教育委員会(Windsor-Essex Catholic DSB)は、2011年以來ずっと図書館の職員も含めて、図書館サービスや資料費を削っている(17)。

「教育のための人々」の2019年の年次報告『学校をつくるのは?』(What Makes a School?)(18)から、2019年の状況も知ることができる。

その年次報告は次のように記している。

ティーチャー・ライブラリアンは、学校でテクノロジーを利用した学習を可能にするのに必須の役割を有している。今年(2019年)、学校図書館を伝統的な図書館とテクノロジーを統合した「ラーニング・コモンズ」へ変容させた学校が増えている。「ラーニング・コモンズ」によって、図書館は協働スペースとなり、そこで教員と児童生徒が共同で知識を構築している(19)。

過去20年間(2000-2019年)、公立小学校におけるティーチャー・ライブラリアンの数は減り続けている。他方、ライブラリー・テクニシャンの数は増え続けている。2019年はパートタイムも含めると、54%の公立小学校にティーチャー・ライブラリアンが配置されている。1998年の80%と比べると大きな減り方である。他方、43%の公立小学校にライブラリー・テクニシャンが配置されている。1999年の16%と比べると大きな増え方である(20)。

地理的な相違もある。トロント市周辺の公立小学校はティーチャー・ライブラリアンが配置され、東部や北部の公立小学校にはライブラリー・テクニシャンが配置される傾向にある。2019年現在、27%の北部の公立小学校にはライブラリー・テクニシャンさえ配置されていない(21)。

社会経済的な相違もある。2019年現在、高所得の地域に設置されている公立小学校には63%ティーチャー・ライブラリアンが配置されているが、低所得層の地域に設置されている公立小学校には48%しか配置されていない。その要因の1つは、オンタリオ州にはすべての学校に十分に機能する図書館を保障するような政策がないためである(22)。

以上が2019年の年次報告の概要であるが、2017年の年次報告には次のようなことが記されている(23)。

州の作成するカリキュラム基準は学校図書館の重要性を認めながらも、ティーチャー・ライブラリアンに関しては「可能ならば」(where available)という放棄条項がある。州からの図書館予算は児童生徒数に応じて教育委員会に配分される。地方の教育委員会は、小学校で763人の児童生徒、中等学校では909人の児童生徒に一人のティーチャー・ライブラリアンのための予算を受け取る。しかし、その教育委員会はその予算を図書館職員のために使う義務はない。また、児童生徒基礎助成金(Pupil Foundation Grant)というものもあり、それは図書館サー

ビスのための助成金も含んでいる。しかし、教育委員会はその助成金をクラスへのコンピュータ設置、教員、教科書等にも使用することができる。

そして、2019年現在、オンタリオ州ではティーチャー・ライブラリアンとライブラリー・テクニシャンを雇用するという方針（政策）を有する教育委員会は10%、ティーチャー・ライブラリアンのみの雇用方針は37%、ライブラリー・テクニシャンのみの雇用方針は32%、何の方針もない教育委員会は13%、存在する24)。

なお、OLAは2018年に、州政府が図書館とティーチャー・ライブラリアン用に割り当てる助成金に対して教育委員会はその意図に沿って使用することを義務付けるよう、すなわち方針を変更するよう、州政府の予算編成部に要望している25)。

3 OLAの『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』

前章でオンタリオ州の学校図書館の状況を概観したが、オンタリオ州の図書館界や学校図書館界は、そのような状況を何の対抗もせずを受け入れていた訳ではなかった。オンタリオ州では2006年にOLAが『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』(*School Libraries & Student Achievement in Ontario*)を公表して、学校図書館の重要性を訴えている26)。

同書は次のように記している27)。

学校図書館に関する多くの研究が、ティーチャー・ライブラリアンを有する学校図書館は児童生徒の成績にプラスの影響を与えることを明らかにしている。児童生徒の読書に対する態度がリテラシーだけでなく、科学や算数(数学を含む)の成績と正の相関関係があることを示している。しかし、カナダには学校図書館と児童生徒の学習成果との関係を調査した研究はない。また、オンタリオ州も含めてカナダでは全体的に公教育の予算が削られて来ている。そのような状況下で、オンタリオ州の教育省(Ministry of Education, Ontario)は最近、児童生徒のリテラシーやニューメラシーを向上させる施策を打ち出そうとしている。しかし、リテラシー・プログラムを優先させて学校図書館の職員やリソースを減少させる傾向は、児童生徒に益する教育資源の可能性を脅かしている。

そのため、OLAはクイーンズ大学(Queen's University)と「教育のための人々」に対して合同調査を依頼した。その調査結果の報告がこの書である。調査の際には限度があったため、3年生と6年生だけを対象に行われた。調査の結果、次のようなことが分かった28)。

- 1) ティーチャー・ライブラリアンを有する学校の3年生と6年生は、有しない学校の3年生と6年生より読書を楽しむ傾向にある。
- 2) 学校図書館学を履修した図書館職員がいる学校で、読書のテストで「レベル3」を達成している6年生が多い。(「レベル3」とは州の決めている達成基準)
- 3) 学校図書館学を履修した図書館職員のない学校では、3年生と6年生の読書のテストは低い傾向にある。

以上のように調査結果を報告し、次のような推薦をしている 29)。

- 1) 学校図書館予算が学校図書館に使われるよう、直ちに教育職員用の給与基準を見直すこと。
- 2) 学校の規模や地域に関係なく、オンタリオ州のすべての児童生徒が、コレクションが十分に専門職の職員がいる学校図書館へアクセス出来るような政策を州の教育省は策定すること。

4 OLA の『オンタリオ州の典型的 (模範的) な学校図書館』

OLA は、学校図書館の重要性を訴えるために、2009 年には『オンタリオ州の典型的 (模範的) な学校図書館』を刊行している。前回の調査では、学校図書館と児童生徒のリテラシー習得とは強い正の相関関係があることが分かったが、児童生徒のリテラシー習得に影響を及ぼす学校図書館の具体的なプログラムや実践等については明らかでなかった。それを明らかにしたのがこの調査報告であるという 30)。

この調査報告書は、前章の調査報告書と同様、OLA の依頼によりクイーンズ大学の研究チームと「教育のための人々」が合同で行った調査報告である。調査は、OSLA によって推薦され、かつ以前から模範的な学校図書館プログラムを提供していると認められている 8 つの小学校の図書館を対象に行われた。調査の結果、次のようなことが分かったとしている。

オンタリオ州には模範的な学校図書館プログラムが存在することが分かった。しかし、「模範的な学校図書館プログラム」とは単一の概念ではなく、複数レベルの概念である。

すなわち、あまりコレクションも良くなく、図書館職員も不十分な学校図書館における「模範的な学校図書館プログラム」から、コレクションも充実しており、図書館職員も十分な学校図書館における「模範的な学校図書館プログラム」まで 3 レベルがあった 31)。

「模範的な学校図書館プログラム」の重要要件は、熱心さと誠実さを備えたティーチャー・ライブラリアンの模範的な教育スキルであった。それを有したティーチャー・ライブラリアンは児童生徒のために指導と学習の機会を最大限にする優秀な教員になっている。それらのティーチャー・ライブラリアンに求められている資質は、現在置かれている学校の環境の中でパートナーシップを組む教員のスタイルに合わせるべく、アプローチを変えることのできる高い柔軟性である。最も成功している学校図書館プログラムの特徴は、指導、学習及び図書館利用においてティーチャー・ライブラリアンと教員が協働していることである 32)。

「模範的な学校図書館」は、学校のハブで目立つ場所に設置されており、活動と学習の中心地である。最も重要なことは図書館を一種の教室であり、学習を歓迎する場所と見なすことである。そのような図書館 (学校) では、ティーチャー・ライブラリアンは校内のリーダーであり、図書館とティーチャー・ライブラリアンは学校の教育を支援する極めて重要な役割を担っている、と認識されている。そして、児童生徒は高い満足感を覚え、図書館をよく利用し、熱心な

読者である 33)。

この報告書は、「模範的な学校図書館」は以下のような校長の支援があってはじめて成功すると記している。

- 1) ティーチャー・ライブラリアンを重要な教員の一人と見なしてくれる。
- 2) 図書館に適切な資料を配分してくれる。
- 3) ティーチャー・ライブラリアンを過剰な準備補助 (“preparation time coverage”: 多忙な教員の授業の穴埋め) から守ってくれる 34)。

5 OSLA の『共同学習』の概観

3 章で OLA の 2006 年作成の『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』、4 章で同 OLA の 2009 年作成の『オンタリオ州の典型的 (模範的) な学校図書館』を概観した。それら 2 つの報告書を受ける形で、OSLA が 2010 年に『共同学習』 (*Together for Learning*) を作成している。この章ではその『共同学習』を概観する。

5.1 ラーニング・コモンズ (Learning Commons) への変容

OSLA の『共同学習』 (*Together for Learning*) は、学校図書館をラーニング・コモンズへ変容させるためのビジョンである。その変容を必要とする要因として、『共同学習』は次のように記している。

現代の学校は大きな変化に直面している。ICT の急激な進歩によって、国際レベルでの政治的、社会的、経済的、科学的な状況が変化しているように、教育も変化している。それらの変化が、人々が働き、遊び、そして学ぶ方法を変化させている。学校は、この変容によってもたらされている不慣れではあるが、しかし極めて魅力的であるこの機会をうまく利用すべく挑戦を受けている。学校は、児童生徒に生き残りのためだけでなく、成功するためにも必要なスキルを身に付けさせて、卒業させる必要がある 35)。

そして、「ラーニング・コモンズ」の概念について次のように記している。

ラーニング・コモンズとは、伝統的な図書館の壁を越えてシームレスな物理的、バーチャルのスペースを統合させたものである。ラーニング・コモンズではすべてのフォーマットが同化された形で学習が行われる。ラーニング・コモンズではアイデアやコンセプトを自由に表明させる。そして、児童生徒を相互に、さらには世界的なコミュニティと連結させることによって学習者に探究心、想像力、発見心及び創造力を奨励する 36)。

また、ラーニング・コモンズは、児童生徒を日々進化しつつあるが身近にある現実やバーチャルな世界に結び付けるために、教室や学校図書館だけでなく教育委員会などまでも組み込

む (incorporate)。インターネットが地球規模のインタラクティブな Web を構築したように、ラーニング・コモンズは学校内外において情報、人々及び学習プログラムのネットワークを構築する。伝統的に人々が集まる場所として設計されている学校図書館はラーニング・コモンズを設置する際に大きな力となる 37)。

また、ラーニング・コモンズは、児童生徒や教育者を学校の壁を越えてバーチャルなスペースへ導く、という従来にはない学習経験の拡大を可能にする。それは活気に満ちた全校的アプローチで、教員、ティーチャー・ライブラリアン及び児童生徒に「協働」という素晴らしい機会を与えてくれる 38)。

児童生徒が将来就くであろう職で成功するためには、転移可能なスキルを学ぶ必要がある。転移可能なスキルを学ぶためには、児童生徒は情報の批判的な消費者、効果的な問題解決者、刷新的な伝達者になる必要がある。その上、それらの転移可能なスキルがこの世の中で彼ら/彼女らに「違い」 (difference) を作る能力を与えるということ、児童生徒に理解させる必要もある。ラーニング・コモンズは、リテラシー、ニューメラシー、知識、思考力、コミュニケーション力及び応用力は学び方を学ぶための基礎であるという「カリキュラム横断型の視野」を基盤にしている。ラーニング・コモンズは個人的、学問的、社会的、文化的成長のために、探究 (inquiry)、想像、発見及び創造性を中核にしている 39)。

5.2 ラーニング・コモンズの機能 (情報入手から知識創造へ)

ラーニング・コモンズの機能は、入手可能な最良のリソース、テクノロジー、戦略、学習環境を利用したダイナミックな学習経験を設計し、準備し、支援することである。児童生徒は学習によって、事実的な情報を単に入手するだけでなく、個人的な意味を構成し、個々の知識及び総合的な知識の構築へと進む。児童生徒はラーニング・コモンズで読み、調査し、発見し、実演し、創造する際には、自分たちの学習をテストし、確認し、豊かにするために、他の人たちと協働する。ラーニング・コモンズでは、児童生徒が情報の入手から知識構築へと進むのをガイドすること、そして必要な指導介入をすることがすべてのパートナーの関心事となる 40)。

児童生徒の情報入手 (読書) から知識構築への旅は、図 1 のようになる。

5.2.1 「読書推進」の旅

上記の図 1 では「読書」の旅から「学び方の学び」の旅まで進み、「深い理解と知識創造」となる。以下で「読書」の旅から「学び方の学び」までの旅について概観する。

最初に「読書」の旅について記すと、児童生徒は自分の好きなことをするよう奨励され、豊富なコレクションから自由に読書財を選べるようにすると読書意欲を沸かす 41)。

そうすると、読書力は増し、理解は深まる。ラーニング・コモンズでは、次のようなことに気を付けることによって、児童生徒に読書習慣を身に付けさせることができる (以下は抜粋)。

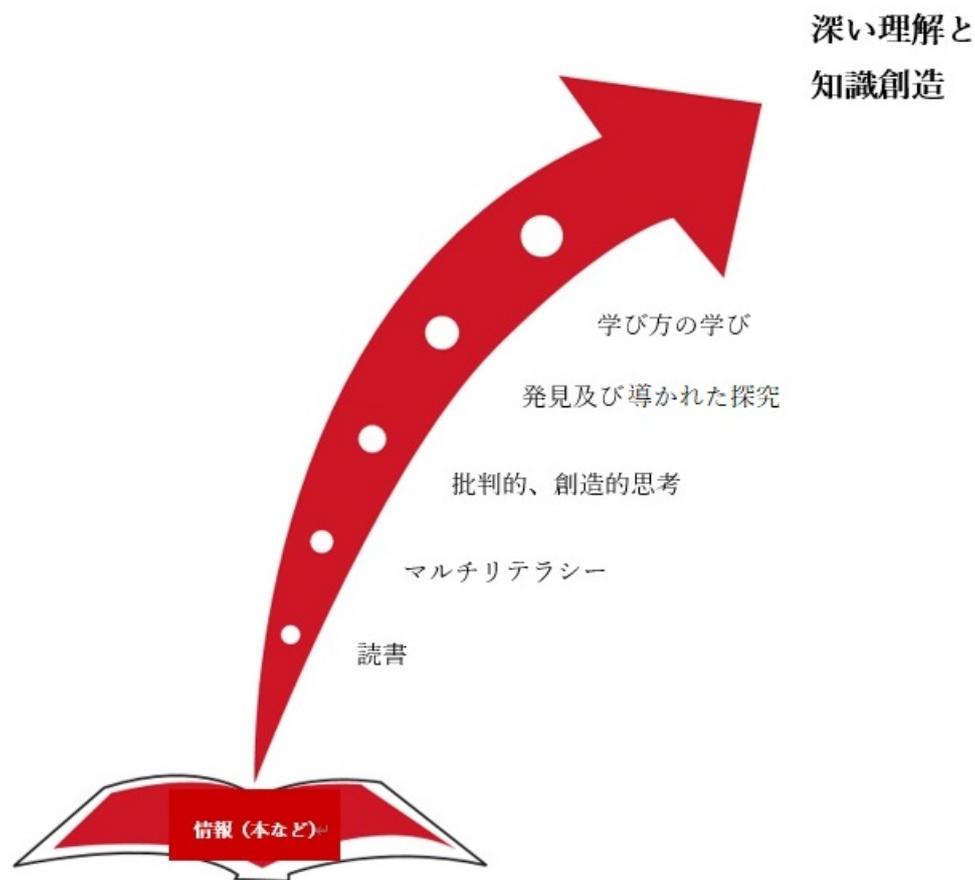


図1 情報(入手)から知識構築への段階

- 個々の児童生徒にその生徒に合った読書財を提供する。
- 個々人の読書を奨励し、達成した際には祝福する。
- ブック・トーク、読書掲示、本のブログ等を促進する。
- オンライン、もしくは対面型のブック・クラブを組織し指導する。
- 児童生徒にブック・トークを奨励する。
- 児童生徒と共に働く著者、イラストレーター等を招待する。
- リテラシー・プログラムのために公共図書館と協力する。
- すべての児童生徒のニーズに合致するよう、オーディオ図書やアシスティブ・テクノロジー等を準備する。

(この旅に書かれていることはラーニング・コモンズが提唱される以前の学校図書館でもすでに取り組まれていたことがほとんどである。)

5.2.2 「マルチリテラシーの育成」の旅

マルチリテラシーとは、伝統的なリテラシー、情報リテラシー、メディアリテラシー、ビジュアルリテラシー、文化リテラシー、デジタル・リテラシー、批判的リテラシー (critical

literacy) のことである。こういう新しいリテラシーをラーニング・コモンズでティーチャー・ライブラリアンが体系的に教える必要がある。新しい伝達ツールや出現してくるテクノロジー、及び社会的・文化的変化によって、我々はリテラシーの意味を再定義する必要に迫られている。現代では、児童生徒は直近の学習目標を成就するために、また自身の創造的可能性を認識し開発するために、マルチリテラシーを使用する必要がある 42)。

デジタルな世界では、児童生徒は協働的著述家であり、コンテンツの創造者である。デジタルな世界は、学習者にマルチリテラシーを身に付ける際に前例のない機会を与えてくれている。マルチリテラシーを身に付けることによって、児童生徒はグローバル・コミュニティについて深く理解する。今日の児童生徒に「書くこと」の意義を理解させるということは、彼ら/彼女らをこの双方向的なオンラインの環境に関与 (従事) させるということである 43)。

5.2.3 「批判的、創造的思考の育成」の旅

批判的、創造的思考は従来から学習の必須要素であったし、現在でもそうである。変わったのは、大量の情報が入手可能となり、その情報の表出法が変わったことである。そのような状況下での児童生徒は、批判的、創造的な思考が出来るようになって初めて、インテリジェンス (intelligence) をもってチャンスに立ち向かうことが出来るようになる。学習は、情報を取り入れるだけでなく疑問も抱く、という柔軟な探究心を必要とする。児童生徒には探究プロセスを通じて自分たちの能力を実践して試す多様な機会が必要である。ラーニング・コモンズは、児童生徒に自身の学習を経験する多くの機会を与える。結果として、児童生徒は生涯を通じて省察的学習者になる 44)。ラーニング・コモンズは、以下のような学習者を育成する 45)。

- 1) 様々な目的のために読んだり書いたりする学習者
- 2) テクストを評価する学習者
(豊富な読書財が溢れる環境の中で、児童生徒は情報の批判的な利用者になる必要がある。)
- 3) 様々なフォーマットのテキストを探索し、作成する学習者
- 4) メディア・テキストを解釈できる学習者
- 5) ビジュアル資料 (images and graphics) を解釈できる学習者
- 6) 深く思考する学習者
- 7) 相互作用的に知識を構築する学習者

5.2.4 「発見と導かれた探究」の旅

学校全体が探究プロセス (inquiry process) に焦点を当てるようになるためには、ラーニング・コモンズの参加者が「探究モデル (inquiry model)」を利用するよう協働する必要がある 46)。そのモデルは、1) 探索する (Exploring)、2) 調査する (Investigating)、3) 整理する (Processing)、4) 創造する (Creating)、の 4 つの段階から成る。それぞれの段階の内容は次のようなものである 47)。

- 1) 探索する
「探索する」とは、児童生徒が探索をスタートさせ、個人的に興味のある適当なトピックを選び、そのトピックに関して深い疑問を持つことである。
- 2) 調査する
(トピックを)「調査する」とは、探究の計画を立て、ソースを見つけ、適切な情報を選択し、明瞭で関心のある焦点を定式化することである。
- 3) プロセスする
「プロセスする」とは、適切だと思って選択した情報を分析し、自分たちのアイデアと選択した情報の中にあるアイデアを比較して評価し、到達した結果を組織化し、統合することである。
- 4) 創造する
(知識を)「創造する」とは、生産物とその生産物の作成に至ったプロセスを評価し、学んだ学習を新しい文脈や探究に移転させることによって、探究の結果を示す生産物を作成することである。

探究モデルには次のような特徴や効用がある 48)。

- 1) 個人の視野と知識基盤を広げる。
- 2) アイディアの衝突を奨励する。
- 3) 興味とやる気を引き起こす現実の課題を取り上げる。
- 4) 本質的な知識やスキルを何度も扱うようにする。
- 5) 情報を整理する戦略を教える。
- 6) 偶然起こったことと、そうなるように仕組んだこと (導かれたこと) を両方活かすようにする。
- 7) ゴールまでスモールステップで進むよう、課題を調整する。
- 8) いつも無理に結論を出さなくてもいいようにする。
- 9) 様々な戦略、資料、テクノロジー及び成果物により学習を広げる。
- 10) 順を追って全体へと説明していくことと、個別への指導とのバランスを取る。
- 11) マルチリテラシーを育成する。
- 12) 新しい方法と今までやってきた方法のどちらがいいか判断できるなど、メタ認知を育成する。
- 13) 協働的学習を奨励する。

「探究プロセス」は批判的思考スキル、問題解決、理解、疑問を発しながら個人的な意味を構築する複雑なプロセスである。「探究プロセス」は明瞭なものを疑い、情報の妥当性、見方や偏見を吟味し、意味を構築することである。そして、「探究モデル」(inquiry model) を効果的に用いれば、素人の学習者が自分たちの情報力に自信を持ち、相互依存型になり、なおかつ独立の学習者になる。その「探究モデル」を実施に移すためには、ティーチャー・ライブラリアンと教員が探究スキルと主題知識を統合する「探究型学習法の文化」を育成する必要がある。

る 49)。

5.2.5 「学び方を学ぶ」に関わる旅

ラーニング・コモンズの機能は、21 世紀の児童生徒のニーズに応える新しい学習文化を構築し、先導していくことである。「学び方の学び」は児童生徒が成功するための必須要件である。ラーニング・コモンズの有する豊富な情報とメディア通 (=ティーチャー・ライブラリアン) が待機している環境が「学び方を学ぶ」を可能にする。ラーニング・コモンズにおけるネットワーク化された学習経験と今何が学ばれているか、どのように学ばれているか、というメタ認知も、「学び方を学ぶ」とつながっている。

児童生徒の学習を進歩させるためには、ユニットやプロジェクトの学習中、常にフィードバックと形成的評価が必要である。児童生徒が自分たちの結論 (findings) を省察したり、他の児童生徒たちと討議したりする時間も必要である。指導スタッフはパートナーシップを組んで、以下のような対面型やバーチャル型の学習機会や学習環境を設計する必要がある 50)。

- 1) 児童生徒同士や教員との途切れない協議ができる。
- 2) 児童生徒は学習中、省察的日誌をつける。
- 3) 児童生徒は学習中、自己評価ツール (self-assessment organizer) が使える。
- 4) 児童生徒は学習パートナーシップの中で、協働してループリックを作る。
- 5) 児童生徒は進歩と次のステップのために目標を設定する。
- 6) 児童生徒は新しい情報と理解を自分の経験と関係づける。
- 7) ポートフォリオを作成する。

6 OSLA の『共同学習』の分析・考察

この章では、2004 年以降のオンタリオ州の学校図書館の状況や OLA の 2 つの刊行物にも言及しながら、『共同学習』を分析・考察する。

まず OSLA の『共同学習』を簡潔に表現すれば、それは「学校図書館のラーニング・コモンズ化」という極めて革新的な学校図書館論である。「学校図書館のラーニング・コモンズ化」という考え方は、ロエツシャー (Loertscher, David V.) 等が既に 2008 年に表明しているが 51)、専門職団体としては OSLA が最初であると推察される。OSLA は、OLA の上記 (3 章と 4 章) の 2 つの刊行物を参考にしながら、ラーニング・コモンズ概念を案出している。

OSLA によると、「ラーニング・コモンズ」とは、「物理的及びバーチャルのスペースを統合させたもの」52) であり、そして、「児童生徒を相互に連結させることによって、児童生徒に探究心、想像力や創造力を奨励するものである」53)。「ラーニング・コモンズは児童生徒を現実及びバーチャルな世界に結び付けるために、学級、学校図書館及び教育委員会を組み込む (incorporate)」54) という。「組み込む」(incorporate) の意味が今一つ明瞭でないが、少なくとも従来の学校図書館とは相当異なる概念である。「今一つ明瞭でない」というのは、「教育委員会を組み込む (incorporate)」という

ことが具体的にどういうことを意味するのか、イメージが湧かないということである。

また、「ラーニング・コモンズは、児童生徒や教育者を学校の壁を越えてバーチャルなスペースへ導くという学習経験を拡大させる。それは活気に満ちた全校的アプローチで、教員、ティーチャー・ライブラリアン及び児童生徒に「協働」という素晴らしい機会を与えてくれる。」55) という記述があり、その記述から、OSLA の提唱する「ラーニング・コモンズ」は教授学 (教育方法) の大きな変容を促している。

『共同学習』はまた、児童生徒の情報入手 (読書) から知識構築までの段階は、1) 読書 (という行為) ⇒ 2) マルチリテラシー (の修得) ⇒ 3) 批判的、創造的思考 (の修得) ⇒ 4) 発見及び導かれた探究 (guided inquiry) ⇒ 5) 学び方の学び (の修得)、の 5 つの段階から成るという。児童生徒の学習は必ずしもそのようにスムーズに進展する訳ではないが、大まかな概念としては納得の行くものである。学校図書館関係者にとって重要なことは、これらは、教授スタッフ (ティーチャー・ライブラリアン、教員、その他のメンバー) の協働によって可能となる、としている点である。

『共同学習』は、学習法 (教授法) として「探究型学習法」を推奨している。そして、次のように記している。

「探究型学習法」は批判的思考スキル、問題解決、理解、疑問を発しながら個人的な意味を構築する複雑なプロセスである。「探究型学習法」は明瞭なものを疑い、情報の妥当性、見方や偏見を吟味し、意味を構築することである。そして、「探究モデル」 (inquiry model) を採用することによって、素人の学習者が自分たちの情報力に自信を持ち、相互依存型になり、なおかつ独立の学習者になる。その「探究モデル」を実施に移すためには、ティーチャー・ライブラリアンと教員が探究スキルと主題知識を統合する「探究型学習法の文化」を育成する必要がある。

『共同学習』の本文では「探究モデル」は軽く紹介されているが、その重要性ゆえに「付録」で詳細な説明が行われている。「探究モデル」は、簡潔に記せば、1) 探索する、2) 調査する、3) プロセスする、4) 創造する、の 4 つの段階から成る。学校図書館関係者にとって留意に値する部分は、教員とパートナーシップを組むティーチャー・ライブラリアンもこの「探究モデル」を熟知していることが期待されている、という記述である。北米ではティーチャー・ライブラリアンの資格として教員免許が必要であることを考慮すると、ティーチャー・ライブラリアンも一種の教員であり、そのような期待は当然かも知れない。

また、「ティーチャー・ライブラリアンと教員が探究スキルと主題知識を統合する「探究型学習法の文化」を育成する必要がある。」の表現は、教育の方法として一部の教科だけでなく、全教科に「探究型学習法」を取り入れるということの意味し、それは教授学 (授業方法) の大きな変革を意味する。

なお、この新しい「探究型学習法」は 2015 年に改訂された IFLA の『IFLA 学校図書館ガイドライン』でも採用され、より鮮明な形で学校図書館活動の一環として位置づけられている 56)。

オンタリオ州の学校図書館界で、すなわち『共同学習』の中に、ティーチャー・ライブラリアンが「探究型学習」の目的や「探究モデル」を熟知することが当然のように記されていることに関しては、オンタリオ州におけるティーチャー・ライブラリアンの資格制度と関係があると推察される。オンタ

リオ州では、教員免許に関する権限はオンタリオ教員カレッジ (Ontario College of Teachers) と称される教員の専門職団体に与えられている 50)。その組織は 37 人の理事 (23 人は会員による選出、14 人はオンタリオ州政府の任命) によって運営されている 58)。教員は会員に成る義務がある。そのオンタリオ教員カレッジは教員免許の種類や要件を決める権限を有している 59)。

ティーチャー・ライブラリアンに関しては、教員の追加資格として位置付けられている。それ故、ティーチャー・ライブラリアンの資格を得るためには、履修資格として教員免許が要求される 60)。日本の司書教諭のような教員資格と司書教諭資格のための同時履修は認められない。

オンタリオ州のティーチャー・ライブラリアンは、ティーチャー・ライブラリアン I (Teacher Librarian, Part I)、ティーチャー・ライブラリアン II (Teacher Librarian, Part II)、ティーチャー・ライブラリアン・スペシャリスト (Teacher Librarian, Specialist)、と 3 レベルが設けられている。ティーチャー・ライブラリアン I は初級、II は中級、スペシャリストは上級という位置付けである。ティーチャー・ライブラリアン II の資格を得るためには I の資格、スペシャリストの資格を得るためには II の資格を保有していなければならない 61)62)。

ティーチャー・ライブラリアン I の資格を得るための要件 (ガイドライン) として、1) 教育専門職としての倫理と実践の基準、2) 教授学的探究 (pedagogical inquiry) の概念、3) オンタリオ州のカリキュラム、政策、法規、フレームワーク、戦略及びリソース、4) ティーチャー・ライブラリアン I の理論的基礎、5) プログラム設計、計画及び実施、6) 学習環境と教授戦略、7) 学習についての省察、文書作成及び解釈、8) 学習における共同責任、9) 「図書館ラーニング・コモンズ」 (Library Learning Commons) の開発と経営管理、10) 研究、研修及び教授学、の 10 領域の中に 121 項目がリストされている 63)。その中から、特徴的と思われる 16 項目を下に記す。

- 指導と学習に関する仮説、信念、理解について批判的に検討する。(2)
- 共同探究者としての教員の専門職アイデンティティと実践を批判的に検討する。(2)
- OSLA などの学校図書館協会によって提唱されているティーチャー・ライブラリアンと学校図書館の変革的な役割を理解する。(2)
- 指導と学習を強化するために、ICT を活用する際の刷新的な実践法を検討する。(2)
- 「学校図書館ラーニング・コモンズ」の設計と、物理的、バーチャルのスペースにおけるコレクション構築を検討する。(2)
- 「学校図書館ラーニング・コモンズ」のファシリテータ (推進役) の役割を理解する。(2)
- この資格の理論的基盤としての批判的教育学や構成主義理論の妥当性を検討する。(4)
- 教育実践について省察し、理論と実践との関係について専門職員間で討議する。また、「学校図書館ラーニング・コモンズ」に出て来る理論と実践の関係についても討議する。(4)
- 「学校図書館ラーニング・コモンズ」に出て来る「指導」と「学習」との関連で、オンタリオ州教育省のカリキュラム、リソース及び政策について批判的に検討する。(4)
- 社会の変化とその変化が児童生徒の学習に及ぼす影響を考慮に入れて、学校図書館を変革する方法を批判的に検討する。(5)
- 「学校図書館ラーニング・コモンズ」と関わる戦略的なプログラム設計、計画及び実施に

- ついて批判的に検討し十分に理解する。(5)
- プロジェクト・ベースや問題解決型の学習を通じて、「情報リテラシー」や「探究」を指導するための様々な戦略を理解する。(6)
 - a) 児童生徒へフィードバックし、また指導法を調整するために、b) 児童生徒を独立した学習者にするために、c) 児童生徒の学習の質を公平に判断するために、評価の方法を批判的に検討する。(7)
 - 図書館の経営管理 (例: 資料の選択・廃棄、目録と分類、予算、発注等) の種々の側面を理解する。(9)
 - 知的所有権、学術的誠実性及びデジタル市民 (性) に関する方針についての広報法を開発する。(9)
 - 図書館施設、資料及びプログラムの最大利用を図るためには校長や地域の人々とのコミュニケーションが重要であることを理解する。(9)
- (注: 上記の 16 項目の最後に付けてある番号は、上記の 10 領域のどの領域に属するものかを示している。)

以上、121 項目の中から 16 項目をリストしたが、オンタリオ州のティーチャー・ライブラリアンは、日本の司書教諭と比較すると、極めて深い知識、能力及び態度を要求されていることが分かる。また、学校図書館学が (専門職としての) 学校図書館専門員の拠って立つ理論だと理解するならば、それら 15 項目に目を通すだけでも、オンタリオ州の教育界や学校図書館界が理解する学校図書館学の奥の深さを知ることができる (64)。

なお、上記の「学校図書館協会によって提唱されているティーチャー・ライブラリアンと学校図書館の変革的な役割を理解する。」は『共同学習』を指しており、『共同学習』を十分に理解せよ、と記している訳である。また、上記の 15 項目の中に固有名詞「学校図書館ラーニング・コモンズ」が出てくるが、それは『共同学習』で提唱されている「ラーニング・コモンズ」のことである。このように、『共同学習』は後に (2015 年に)、ティーチャー・ライブラリアンが資格を取得するための文献になっている。

なお、『共同学習』 (基本理念) は、2015 年現在で約 600 の学校を擁するトロント地区学校 (教育) 委員会 (Toronto District School Board) で採用されている (65)。

以上のように、オンタリオ州の教育界や学校図書館界では学校図書館やティーチャー・ライブラリアンの重要性が認識されている。そのように重要性が認識されているにも拘わらず、何故、第 2 章で見たように、オンタリオ州の公立学校ではティーチャー・ライブラリアンの数は 2004 年以降減少の状況が続いているのだろうか。

その要因の 1 つとして、次のようなことが推察される。

「教育のための人々」が上記しているように、地域の教育委員会は小学校で 763 人の児童生徒、中等学校では 909 人の児童生徒に一人のティーチャー・ライブラリアンのための予算をオンタリオ州教育省から受け取る。しかし、教育委員会はその予算をティーチャー・ライブラリアンや図書館職員のために使う義務はない (66)。それは、教育の主体者はクラスの教員であり、ティーチャー・ライブラ

リアンは必須要素でなく、支援者の位置づけであることを意味している。そのように、オンタリオ州教育省と地域の教育委員会のティーチャー・ライブラリアンに対する理解(理解不足?)のために、オンタリオ州の公立学校の図書館はティーチャー・ライブラリアン不足に悩んでいると推察される。

オンタリオ州教育省は、小学校と中等学校に分け、教科(主題)単位でカリキュラム基準(日本の学習指導要領に相当)を作成している。児童生徒は、それら教科をマスターすると同時に、教科に内包される「転移可能なスキル」(transferable skills)もマスターすべきだとしている。「転移可能なスキル」とは一般にコンピテンシー(competencies)と呼ばれたりしているもので、それらは1) 批判的思考力と問題解決能力、2) 刷新的、創造的、起業的能力、3) 自発的学習力、4) 協働力、5) コミュニケーション力、6) 地球市民性と持続性、7) デジタル・リテラシー、の7つのスキルからなる(67)。

オンタリオ州教育省は、そのカリキュラムを実践に移す際の教育計画に関しても記している。その教育計画項目の1つに「学校図書館の役割」があり、図書館プログラムは情報リテラシーとリサーチ・スキルを育成する際に重要な役割を負っている、と記している。また、勤務しているならば、ティーチャー・ライブラリアンはクラス担任教師や教科担任教師と協働して指導計画を立て教授する、とも記している。さらに、ティーチャー・ライブラリアンは児童生徒が以下のような能力を有するよう教師と協働する、とも記している(68)。

- 1) 情報にアクセスし、選択し、集め、処理し、客観的に評価し、創造し、伝達する能力
- 2) 課題を探索・調査し、問題を解決し、意思決定をし、知識を構築し、個人的な意味を創造し、人生を豊かにする能力
- 3) 様々なフォーマットやテクノロジーを利用して、自分たちの調査結果を他の聴衆に伝達する能力
- 4) デジタル・リテラシー
- 5) 調査プロジェクトのための探究質問を作る能力
- 6) マルチメディアを利用したプレゼンテーション能力

以上、オンタリオ州教育省が世界的な教育の流れに同調して、コア・コンピテンシー(「転移可能なスキル」)を教育目標の1つに掲げ、学校図書館の重要性についても述べていることを記した。しかし、学校図書館に関する大きな問題点は、ティーチャー・ライブラリアンに関する記述である。すなわち、「勤務しているならば」と記し、ティーチャー・ライブラリアンは必置でなく、地方の教育委員会の裁量に任していることである。

オンタリオ州も含めてカナダの経済状況は21世紀に入ってからからは良くない。そのせいで、教育予算は削減されて来ている。教育はクラス担任や教科の教員を中心に教室で行われるものであるという教育観がある限り、ティーチャー・ライブラリアンは教員と認められていても、その他の教員(北米では educational specialist という呼称がよく使われる)のカテゴリーに入り、予算削減の必要性が生じたとき、削減の優先的対象になるのはティーチャー・ライブラリアン等である。それは宿命のようなもので、オンタリオ州の学校図書館界が例示していると言える。

しかし、オンタリオ州の図書館界と学校図書館界は2006年には『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』、2009年には『オンタリオ州の典型的(模範的)な学校図書館』、2010年には

『共同学習』を刊行し、精力的に活動している。何故そんなに精力的なのだろうか。その要因は、オンタリオ州のライブラリアンやティーチャー・ライブラリアンが教育における学校図書館の意義を理解し、その上、自分たちは専門職(員)だという自負と信念を有しているからである、と推察される。

7 おわりに

2章でのオンタリオ州の学校図書館の概況を手始めに、3章でOLAの『オンタリオ州における学校図書館と児童生徒の成績』、4章で同OLAの『オンタリオ州の典型的(模範的)な学校図書館』に言及し、5章でOSLAの『共同学習』を概観し、6章で『共同学習』を分析・考察した。

OSLAの『共同学習』は、学校図書館の「ラーニング・コモンズ」化であり、優れた学校図書館改革論であった。その改革論の中で、ティーチャー・ライブラリアンの役割が極めて重要視されていることが特徴的であった。しかし、その改革論は逆境の中での改革論であった。その逆境は予算配分の実権を握っているオンタリオ州教育省の学校図書館に対する理解の仕方(理解不足?)に起因していると推察された。

そのようなことから、学校図書館の進展・向上は国や州の学校図書館政策と密接な関係があることが分かる。ティーチャー・ライブラリアンや日本の司書教諭が専門職として履修するのが学校図書館学であるとするならば、その履修科目の中に「学習論」(「学習方法論」)や「学校図書館政策」(教育政策や図書館政策も含めて)等が入るべきであると推察される。

また、日本の学校図書館界とオンタリオ州の学校図書館界は、状況(文脈)は異なるけれども同じ逆境にある。国の学校図書館政策や施策に対して納得が行かなければ、学校図書館界は国(文部科学省)を理論的に説得可能な理論武装をする必要があることも『共同学習』は示唆している。日本の学校図書館界が文部科学省の策定した学校図書館政策や施策を如何に効率よく実践するか、により多くのエネルギーを注いでいたら、未来は明るくないように思われる。

文部科学省に設置された「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」は、「児童生徒は、学校図書館の資料や情報を利活用して、探究的な学習を繰り返し経験することにより、情報を適切に収集・選択・活用する技能を身につけることを通して、推論する力や見通す力などを身に付け、これまで経験したことのない状況にも対応できるようになる。つまり、学校図書館の利活用は'学び方を学ぶ'ことでもある」(69)、と記しており、日本(文部科学省)でも『共同学習』の基盤である「探究型学習法」というアプローチはある程度受け入れられている。

しかし、新聞報道(70)や佐藤が『専門家として教師を育てる』で記すように(71)、日本の公立学校の教員の職場(勤務)状況は過酷で、『共同学習』が推奨する「探究型学習」を実践するには厳しい状況にあることも認識しておく必要があるだろう。

注および引用文献

- 1) K. Haycock, *The Crisis in Canada's School Libraries: The Case for Reform and Reinvestment*. Toronto: Association of Canadian Publishers, 2003.7, 54p. <<http://accessola2>.

- com/images/home/HaycockACP2_v2rev.pdf>. [引用日: 2020-03-20]
- 2) D. Coish, *Canadian School Libraries and Teacher Librarians: Results from the 2003/04 Information and Communications Technologies in Schools Survey*. Ottawa, Statistics Canada, 2005.5, 43p. <<https://www150.statcan.gc.ca/n1/en/pub/81-595-m/81-595-m2005028-eng.pdf?st=Czr2XK0u>>. [引用日: 2020-03-20]
 - 3) *ibid.*, p.7.
 - 4) Royal Society of Canada, *The Future Now: Canadian Libraries, Archives, and Public Memory*. 2014.11, p.153. <https://rsc-src.ca/sites/default/files/L%26A_Report_EN_FINAL_Web.pdf>. [引用日: 2020-03-20]
 - 5) Ontario School Library Association, *Together for Learning; School Libraries and the Emergence of the Learning Commons: A Vision for the 21st Century*. 2010, 53p. <<http://www.accessola.org/web/Documents/OLA/Divisions/OSLA/TogetherforLearning.pdf>>. [引用日: 2020-05-15]
 - 6) British Columbia Teacher Librarians' Association, *From School Library to Library Learning Commons: A Pro-Active Model for Educational Change*, 2014.5, 32p. <<https://bctla.ca/wp-content/uploads/2018/02/from-school-library-to-library-learning-commons.pdf>>. [引用日: 2020-05-15]
 - 7) Canadian Library Association, *Leading Learning: Standards of Practice for School Library Learning Commons in Canada*. 2014, 37p. <<http://llsop.canadianschoollibraries.ca/wp-content/uploads/2016/09/llsop.pdf>>. [引用日: 2020-05-15]。なお、CLA は 2016 年に解散したので、その所有権は Canadian School Library Association に譲渡されている。
 - 8) Treasure Mountain Canada, *Treasure Mountain Canada*, 2020. <<https://tmc.canadianschoollibraries.ca/>>. [引用日: 2020-06-15]
 - 9) Ontario Library Association, *School Libraries & Student Achievement in Ontario*. 2006.4, 18p. <<https://www.accessola.org/web/Documents/OLA/Divisions/OSLA/SchoolLibrariesStudentAchievementOntario.pdf>>. [引用日: 2020-04-15]
 - 10) Klinger, D.A.; Lee, E.A.; Stephenson, G.; Deluca, C.; Luu, K., *Exemplary School Libraries in Ontario*. Ontario Library Association, 2009, 49p. <<https://www.accessola.org/web/Documents/OLA/Divisions/OSLA/Exemplary-School-Libraries-in-Ontario.pdf>>. [引用日: 2020-04-15]
 - 11) キャロル ケ克蘭, ジュディス サイクス著 (岡田大輔訳) 「3. カナダにおける学校図書館の全国基準の開発」『IFLA 学校図書館ガイドラインとグローバル化する学校図書館』バーバラ・A. シュルツ＝ジョーンズ, ダイアン・オバーク編著, 大平睦美, 二村健編訳, 学文社, 2016.8, p.18-29.
 - 12) 関口礼子は『学校図書館』誌に 2000 年から 2010 年にかけて、計 21 回カナダの学校図書館に関する報告を行っている。
 - 13) 全国学校図書館協議会カナダ・アメリカ学校図書館視察団編『カナダ・アメリカに見る学校図書館を中核とする教育の展開』全国学校図書館協議会, 2006.3, 143p.

- 14) People for Education, *Annual Report on Ontario's Publicly Funded Schools 2013*, 2013, p.5. <<http://education.chiefs-of-ontario.org/upload/documents/resources/research-reports/reports-education/p4e-mind-the-gap-2013.pdf>>. [引用日: 2020-04-28]
- 15) *ibid.*, p.5.
- 16) People for Education, *The Geography of Opportunity: What's Needed for Broader Student Success (Annual Report on Ontario's Publicly Funded Schools 2016)*, 2016, p.9-10. <<https://peopleforeducation.ca/wp-content/uploads/2017/06/P4E-Annual-Report-2016.pdf>>. [引用日: 2020-04-28]
- 17) *ibid.*, p.9.
- 18) People for Education, *What Makes a School? Annual Report on Ontario's Publicly Funded Schools 2019*, 2019, 68p. <<https://peopleforeducation.ca/wp-content/uploads/2019/06/PFE-2019-Annual-Report.pdf>>. [引用日: 2020-04-28]
- 19) *ibid.*, p.9.
- 20) *ibid.*, p.10.
- 21) *ibid.*, p.11.
- 22) *ibid.*, p.11.
- 23) People for Education, *Libraries 2017*, 2017, p.2. <<https://peopleforeducation.ca/wp-content/uploads/2017/06/P4E-Libraries-2017.pdf>>. [引用日: 2020-04-28]。パターンソン (S. Paterson) も 2019 年に同様なことを記している。参照: Paterson, S., "School Library Funding in Ontario", *The Teaching Librarian*. 27(1), 2019.9, p.35. <<http://www.accessola.org/WEB/Documents/OLA/News/Teaching-Librarian/TingL-27-1.pdf>>. [引用日: 2020-08-05]
- 24) People for Education, *op. cit.* 18), p.11.
- 25) Ontario Library Association, *2018 Ontario Pre-budget Submission*, p.1, 10-11. <<http://www.accessola.org/WEB/Documents/OLA%20FOPL%20pre-budget%20submission%202018.pdf>>. [引用日: 2020-04-28]
- 26) Ontario Library Association, *op. cit.* 9), 18p.
- 27) *ibid.*, p.1-2.
- 28) *ibid.*, p.2.
- 29) *ibid.*, p.3.
- 30) Klingler, D.A.; Lee, E.A.; Stephenson, G.; Deluca, C.; Luu, K., *op. cit.* 10), p.4.
- 31) *ibid.*, p.36.
- 32) *ibid.*, p.36.
- 33) *ibid.*, p.36.
- 34) *ibid.*, p.36.
- 35) Ontario School Library Association, *op. cit.* 5), p.2.
- 36) *ibid.*, p.2.

- 37) *ibid.*, p.3.
- 38) *ibid.*, p.3-6.
- 39) *ibid.*, p.3-6.
- 40) *ibid.*, p.14.
- 41) *ibid.*, p.17.
- 42) *ibid.*, p.18.
- 43) *ibid.*, p.18.
- 44) *ibid.*, p.21-22.
- 45) *ibid.*, p.21-22.
- 46) *ibid.*, p.23.
- 47) *ibid.*, p.24.
- 48) *ibid.*, p.23.
- 49) *ibid.*, p.25.
- 50) *ibid.*, p.27.
- 51) Loertscher, David V., Carol Koechlin, and Sandi Zwaan. *The New Learning Commons: Where Learners Win!* Hi Willow, 2008, 132p.
- 52) Ontario School Library Association, *op. cit.* 5), p.6.
- 53) *ibid.*, p.6.
- 54) *ibid.*, p.6.
- 55) *ibid.*, p.3.
- 56) IFLA Section of School Libraries, *The IFLA/UNESCO School Library Guidelines*. 2002, p.39, 41-44. <<https://archive.ifla.org/VII/s11/pubs/sguide02.pdf>>. [引用日: 2020-05-15]
- 57) Ontario College of Teachers, *What we do*. <<https://www.oct.ca/about-the-college/what-we-do/>>. [引用日: 2020-05-07]
- 58) Ontario College of Teachers, *Council*. <<https://www.oct.ca/about-the-college/council/>>. [引用日: 2020-05-07]
- 59) Ontario College of Teachers, *op. cit.* 57).
- 60) Ontario College of Teachers, *Do I Have to Be a Certified Teacher to Take Courses Leading to Additional Qualifications?* <<https://www.oct.ca/faqs/additional-qualifications/do-i-have-to-be-a-certified-teacher-to-take-courses-leading-to-additional-qualifications>>. [引用日: 2020-09-14]
- 61) Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto, *PK12-LIB2 – Teacher Librarian Part 2*. <<https://cpl.oise.utoronto.ca/search/publicCourseSearchDetails.do?method=load&courseId=20603>>. [引用日: 2020-09-14]
- 62) Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto, *PK12-LIBSP - Teacher Librarian Specialist*. <<https://cpl.oise.utoronto.ca/search/publicCourseSearch>

- Details.do?method=load&courseId=20606>. [引用日: 2020-09-14]
- 63) Ontario College of Teachers, *Additional Qualification Course Guideline Teacher Librarian, Part 1*, 2015, p.8-19. <https://www.oct.ca/-/media/PDF/Additional%20Qualifications/EN/Schedule%20D/Part%20I/i_librarianship_e.pdf>. [引用日: 2020-09-12]
- 64) 因みに、(オンタリオ州で) ティーチャー・ライブラリアン資格のための教育機関はトロント大学 (Univ. of Toronto)、クイーンズ大学 (Queen's Univ.)、ヨーク大学 (York Univ.)、ウインザー大学 (Univ. of Windsor)、ウェスタン大学 (Western Univ.)、オンタリオ小学校教師連盟 (Elementary Teachers Federation of Ontario: オンライン・コース) のみである。
- 65) Toronto District School Board, *Library and Learning Commons, K-12 (Teaching and Learning Expected Practice Series)* . 2014, p.1-4. <<https://www.canadianschoollibraries.ca/wp-content/uploads/2018/03/TDSB-Learning-Commons-Expected-Practice.pdf>>. [引用日: 2020-06-16]
- 66) People for Education, *op. cit.* 23), p.2.
- 67) Ministry of Education, Ontario, “What Else Are Students Learning?” *Curriculum and Resources*. <<https://www.dcp.edu.gov.on.ca/en/>>. [引用日: 2020-08-06]
- 68) Ministry of Education, Ontario, *The Role of the School Library*. <<https://www.dcp.edu.gov.on.ca/en/program-planning/considerations-for-program-planning/the-role-of-the-school-library>>. [引用日: 2020-08-06]
- 69) 文部科学省学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議『これからの学校図書館の整備充実について (報告)』2016, p.4. <https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/10/20/1378460_02_2.pdf>. [引用日: 2020-08-06]。また、根本は、「探究学習とあり方と学校図書館」の中で、『共同学習』が提唱する「探究型学習法」とほとんど同一の「探究型学習法」を提唱している。参照: 根本彰「第6章 探究学習のあり方と学校図書館」『カリキュラム・イノベーション: 新しい学びの創造へ向けて』東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編, 東京大学出版会, 2015, p.77-93. さらに、東山由依の文献に出てくるB校では『共同学習』が推奨する「探究型学習」に相当近いものが実践されていると推察される。参照: 東山由依「司書教諭制度の限界と可能性」*St. Paul's librarian.* 30, 2015, p.95-119.
- 70) 根岸拓朗, 円山史, 聞き手・峯俊一平 「忙しすぎる先生、長時間労働は「残業代なし」も一因か」『朝日新聞デジタル』 (2018年6月17日5時02分). <<https://www.asahi.com/articles/ASL6F663WL6FUTIL05D.html>>. [引用日: 2020-06-28]
- 71) 佐藤学『専門家として教師を育てる: 教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店, 2015。なお、全日本教職員組合は2017年に「教職員の長時間過密労働の抜本的な解決を求める全教の提言」を作成している。<<http://www.zenkyo.biz/pdf/171122teigen.pdf#search='%E6%95%99%E5%93%A1+%E9%95%B7%E6%99%82%E9%96%93%E5%8A%B4%E5%83%8D'>>. [引用日: 2020-06-28]